

シンポジウム 「増田友也の福山における活動について」 を終えて

藤原 美樹 福山大学工学部建築学科

1. 増田友也と尾道

筆者の生まれ故郷の尾道には、今も心に刻まれた建築があります。増田友也(1914-81年)設計の尾道市役所(1960年竣工)と尾道市公会堂(1963年竣工)です。幼少期から親しんだこの二つの建築は、海(尾道水道)に面して建ち、その堂々たる佇まいで訪れるものをいつも圧倒的な存在感で迎えてくれました。近代建築でありながら、千光寺や浄土寺が点在する山麓の景観、かつては「家船^①」が行き交った海辺の情緒と見事に調和し、新たな町のシンボルとして市民に愛されていました。

① 筆者は2011-2015年、尾道家船ほか国内外の水上生活者の調査を実施した。

その融和の秘密は増田の設計思想にあります。建築家であり教育者であった佐藤重夫^②は「尾道市庁舎について」『新建築』(第35巻第8号)で次のように評しています。

「質素な外観はこの地方の倉を連想させて好ましい。設計者は薬師寺東塔を意図したのではなく、結果として当麻寺東塔のような佇まいになったのであって、決して浄瑠璃寺の塔のようなものではなかった。彼の力量は、土蔵の壁であれバルコニーとガラスの壁であれ、この庁舎を力強く包みながら、尾道の街にふさわしい雰囲気添えた点にある」(p.38)

② 佐藤重夫(1912-2003年)は、岡山県早島町出身の建築家である。戦後、福山や倉敷の復興計画に携わった。設計を中心に建築計画、意匠を担当した。また、民家や集落の調査を行い記録したことは、後の民俗建築研究に繋がる。

佐藤重夫は東京大学で岸田日出刀^③らに師事し、建築や木橋に機能美を見出した人物です。薬師寺東塔やブルーノ・タウトの思想を通して「建築は謙虚であることが美の本質」と悟り、建築の本質を追究し続けました。彼が「塔」と表現した尾道市庁舎は西洋建築の模倣ではなく、日本の伝統的建築様式美を現代的に解釈したものでした。残念ながら現存しない両建物ですが、山と海に抱かれた尾道の文化的記憶として私たちの心に生き続けています(図1、2)。

③ 岸田日出刀(1899-1966年)は、講義「建築計画概論」において「建築とは何か」「建築の本質」について追求している。著書『日本文化第六十三冊 日本建築の特性』に日本建築の美しさは屋根にあり、また日本建築の造形の特徴は直線的であることが述べられる。



図1 旧尾道市庁舎(1960年竣工)

出典：尾道市文化振興課提供



図2 尾道市公会堂(1963年竣工)

2020年に解体 出典：尾道市文化振興課提供

2. 増田友也の建築

増田氏は1957年より1981年に逝去するまでの24年間に61件の建築を設計し、その3分の1は鳴門市に集中しています。2022年12月に、筆者は初めて増田の鳴門建築群を訪れ、以下の代表的作品を実見しました。鳴門市文化会館(1982)、鳴門市島田小学校(1981)、鳴門市桑島幼稚園(1976)、瀬戸小学校体育館(1977)、北灘西幼稚園(1974)、鳴門市第二中学校(1978)、鳴門市北灘東小学校(1972)。

これらの建築は、圧倒的な存在感と高い建築美を持ち、深い感動を覚えるとともに、増田建築研究への熱意をさらに強くするものでした。

現在、福山大学建築学科2期生、増田ゼミに所属していた常松光政氏と共同で、増田建築の体系的な研究を進めています。以下に研究概要を述べます。



写真1 鳴門市文化会館
京都大学増田友也研究室＋
一級建築士事務所「生活環境研究所」
出典：筆者撮影（2022年12月）



写真2 鳴門市瀬戸幼稚園
京都大学増田友也研究室＋
一級建築士事務所「生活環境研究所」
出典：筆者撮影（2022年12月）



写真3 鳴門市島田小学校・幼稚園
京都大学増田友也研究室＋
一級建築士事務所「生活環境研究所」
出典：筆者撮影（2022年12月）



写真4 鳴門市第二中学校
京都大学増田友也研究室＋
一級建築士事務所「生活環境研究所」
出典：筆者撮影（2022年12月）

④ 藤原美樹／常松光政 日本建築学会学術講演梗概集、pp.97-98、2021

「増田友也の研究 増田友也の目指した新しい建築教育について」^④

増田友也は1980年に福山大学に着任し、大学院レベルの内容を建築学科2年生の「建築論」、4年生の「建築特論（空間論）」に取り入れるという革新的な教

育を展開しました。増田の講義データ(音声データ)を分析すると、彼の教育方針が当時の建築教育の枠組みを大きく刷新し、福山大学に新しい建築教育の方向性をもたらしたことが明らかになります。その内容は、建築の外見や内部構成といった実践的知識に留まらず、哲学者の理論を援用しながら「建築の前提条件」そのものを問い直すという点に特徴があります。講義では、建築家の在り方に繰り返し言及し、ヘーゲルの弁証法的手法(These → Anti-These → Syn-These)を用いて議論を多角的に展開することで、本質的な理解へと導く対話型の授業スタイルを確立しました。このような増田の教育アプローチは、具体例を多用して学生の理解を深める工夫が凝らされており、福山大学における建築教育の新たなモデルを創出したと言えます。

⑤ 藤原美樹／常松光政 日本建築学会学術講演梗概集、pp.17-18、2022

「増田友也の研究 その2 福山大学における建築思想の進化について」^⑤

本研究では、京都大学時代の思想と福山大学での講義内容の変遷を比較検討しました。福山大学の講義資料(音声・ノート)からは、増田が「物」「道具性」「道具から空間への飛躍」という概念をより体系的に深化させていたことが明らかになりました。これは京都大学時代には見られなかった特徴であり、当時のスタイルが「建築の原点」を細部まで追究するものであったのに対し、福山大学では現象学(特にフッサール)を基盤とし、弁証法的アプローチにより「空間論」に至る論理構造を緻密に明示しています。さらに、第三者にも理解しやすい形で理論を再構築している点は、増田の京都大学退官後の思想を深く掘り下げ、補完する貴重な記録となっています。こうした理念の深化は、彼の建築思想の質的向上を示すものであり、福山大学における研究活動の重要な意義を示しています。

⑥ 藤原美樹／常松光政 日本建築学会学術講演梗概集、pp.807-808、2023

「増田友也の研究 その3 フッサールへの思惟の展開」^⑥

増田は京都大学在職時代(1950-1978年)、ハイデガーの存在論『存在と時間』を基盤に、存在論を深化させ、道具性＝道具的連関や世界内存在(In-der-Welt-Sein)の概念をさらに発展させ、「世界として投げ返す」段階にまで推し進めていました。一方、福山大学時代の講義(1980-1981年)では、存在論としては主にハイデガーを扱いながらも、その道具性＝道具的連関に関する説明の詳細さは京都大学時代ほどではありませんでした。代わりに認識論としてフッサールの現象学、特にエポケー(現象学的還元)や志向性(Intentionalität)、さらに純粹意識の概念が重視されました。増田は「見る対象は射映(Abschattung)によって積み重なり、構成され、志向性の先に対象が形成される」と論じ、この現象学的理解を展開しています。講義の中ではデカルトの「Cogito ergo sum(我思う、ゆえに我あり)」を志向性の具体例として繰り返し引用し、学生にわかりやすく説明していた点も特徴的です。こうした福山大学での存在論から空間論への展開には、京都大

学時代とは異なるアプローチが見られ、存在論的アプローチからの一定の脱却、すなわちフッサールへの方向転換がうかがえます。また、京都大学時代には道元の『正法眼蔵』に対する思索を深めていた増田ですが、福山大学の講義では道元に限らず松尾芭蕉の俳句、セザンヌや葛飾北斎の絵画、メルロ＝ポンティの身体論など、多様な文学・美術・哲学の具体例を援用して議論を広げています。これは、フッサールがフ란ツ・ブレンターノの志向性 (Intentionalität) を出発点に現象学を構築したように、増田がハイデガーとフッサールの思想を対比・統合しつつ発展させ、建築的空間の現象についてより深い考察を行ったことを示しています。以上の点を踏まえると、増田の福山大学時代の思想展開は、単なる進化ではなく既存の認識を補完・拡充しつつ深化させたものであると位置付けるべきであり、その評価には慎重かつ多角的な検討が求められます。

⑦ 藤原美樹／常松光政 日本建築学会学術講演梗概集、pp.841-842、2024

「増田友也の研究 その4 講演「木造塔婆」について」^⑦

増田は晩年の1980年10月、「木造塔婆について——伝統ということ」と題した講演を3部作として内容を変えながら行いました。その講演内容から、二重性に関する論点を下記①～⑩に整理しました。

- ① 軒の深さに伴う二重垂木の発生
- ② 軒反りへの対応による尾垂木の二重化
- ③ 軒反り・二重垂木から派生する木負(きおい)と茅負(かやおい)の二重構造
- ④ 深い軒からの二重垂木が力垂木(ちからだるき)を生んだ過程
- ⑤ 尾垂木の二重性が二重隅木(すみき)の発生につながった経緯
- ⑥ 木負・茅負・軒反り・力垂木が野屋根を形成する構造
- ⑦ 野屋根内部における桔木(はねぎ)の考案
- ⑧ 支掛け・支割り・六支掛けの完成と論理の確立
- ⑨ 心柱(しんばしら)との構造的無関係性——最終的には掘っ建て式工法による、1階屋根裏の梁上から立てる外装と心柱の二重性
- ⑩ 構造と意匠の完全分離に伴う木造塔婆デザインの衰退

福山大学での講義では話題が心柱・刹柱(さっちゅう)に移行。蘇我馬子が司馬達等から舍利を受けて大野の丘に建てた塔を物部氏が斫り倒した事例や、永寧寺の掘っ建て式心柱を挙げつつ、中国の刹柱(地中埋め込み式)の習俗——殷代・漢代の起源説や伊勢神宮の「心の御柱」にまで講義が及びましたが、これも概要にとどまり時間切れとなりました。

「増田友也の研究 その5 講演「木造塔婆」から心柱、刹柱の考察」^⑧

(1980年10月 福山大学学内講演「木造塔婆について——伝統ということ」より)

心柱の構造的独立性について：講演においては、八角形断面の心柱が「基壇上3m下から固定されていた」という事例が言及されており、これは極めて重要な指摘です。心柱は地上約30mにわたって一本の材で構成されますが、構造体としての力学的要求には直接的には関与しません。法輪寺・法起寺の事例や尾道・西国寺三重塔の検証からも、五重塔建設において心柱の先行建立が必須だったのは建築工程上の慣習であって、構造上必然性ではなかったことが確認されます。

二重の歴史的系譜：「心柱(『刹』の誤記説も存在)」がインドの卒塔婆伝統に由来し、一方で高層木造建築技術は中国に起源を持つという二重の歴史的系譜に注目しています。両者の間に直接の結びつきはなく、この「木造の二重性」は心柱の変遷過程(掘立柱→礎石設置→江戸期の中吊り構造)にも反映されています。飛鳥寺・四天王寺の伽藍配置では塔が中心的存在として舍利信仰を体現しましたが、心柱は象徴的装置であり構造要素ではありませんでした。のちに法隆寺・薬師寺では塔の位置が伽藍の中心から移動し、意匠的・精神的意味がより顕在化しています。特に仁和寺(888年建立)の例では、心柱が四天王柱や仏像群に囲まれて礼拝対象化し、その宗教的機能が明確に示されています。

刹柱の語源と実態：『日本書紀』の「大野の塔」破壊記事(物部氏による「刹柱斫り倒し」)に関連し、村田治郎は中国建築用語「刹柱」または「檨(せつ)」を援用しました。講演で言及される「斫代刹柱」の記述は、塔の最上部にある相輪(露盤・伏鉢・九輪・宝珠など)を指す中国語「塔刹(tǎshā)」に対応すると解釈されます。したがって、刹柱は相輪そのものであり、心柱とはその起源や意義を異にするものです。

心柱は舍利信仰の象徴として発展した非構造材であり、刹柱は相輪を支える中国由来の塔頂部装置であります。両者の混同は語義の誤用によるものであり、建築史的には明確に区別される概念です。

以上、福山大学建築学科第2期生で増田友也氏の下で学んだ常松光政氏との共同研究を通じて、増田友也が提唱した建築理論の体系的理解とその実践的応用の解明を継続的に進めてきた内容について、まとめて紹介しました。

こうした研究成果を、建築関係者のみならず、建築を志す学生の皆様ならびに地域の方々とも共有すべく、2025年11月29日に「増田友也の福山における活動について」と題するシンポジウムを開催しました。そこでは、増田建築の理論的体系とその現代的意義について、多方面から検討を行いました。以下にその概要を示します。

3. シンポジウム「増田友也の福山における活動について」

3.1 基調講演「増田友也の建築作品と建築論」について

田路貴浩氏（京都大学大学院工学研究科建築学専攻教授）

増田友也氏の建築作品とその思想的背景について、京都大学の田路貴浩教授に基調講演を賜りました。以下にその要旨と、内容のメモを紹介します。

●講演要旨

建築家・増田友也（1914–1981）の人物像・作品・研究思想を包括的に紹介するシンポジウムの基調講演であり、同時に増田の建築思想——建築が「形態ではなく空間による自然の象徴」を目指す——を中心に、技術・資料・哲学的背景を横断して解説するものである。前半は1950年代から1970年代に至る具体的作品群（住宅、公共建築、上下水道インフラ、大学施設、鳴門での多数の建築など）を年代順・技術背景とともに紹介し、改修・法規対応の現況（鳴門市文化会館は改修中で2027年夏再オープン予定、鳴門市民会館等は2024年に解体）にも触れる。後半では道元やハイデガーを参照しつつ、「清浄本然なる山河大地」に根差した自然観、半隔離（半透明）による「自然」の象徴化、乱反射をもたらす木製型枠による打ち放しコンクリート仕上げ、象徴が「指し示して消える」矢印のメタファーなどを、平易に解説する予定である（難解で眠くなる可能性ありとの断り付き）。資料群は京都大学桂図書館に多数保管され、京都大学研究資源アーカイブで一部公開されている。

1. 増田友也の人物像・経歴

・生没と人物像

- 1914年生、1981年没。講師は1981年入学のため面識なし。「容姿端麗」「哲学的で難解な建築論」の人物評。

・学歴・所属・職歴

- 淡路島八木出身。姫路高校から京都大学へ。36歳で京大講師、1963年教授昇格、1978年退官後福山大学教授、翌年逝去。
- 戦時中は満州でコンクリート船（厚さ10cm、3隻試作）の軍事プロジェクトに従事し、コンクリート技術を体得。

・世代的文脈

- 丹下健三と同世代。東京に丹下、京都に増田という対置。代々木競技場（1964）を意識した京大講堂＋体育館一体計画を構想。

・作風と仕事量

- 約30年に濃密な実務。プレストレストコンクリートやシェル構造など最先端技術を用いるモダニズムのコンクリート建築を一貫追求。1970年代のポストモダニズム台頭期にも揺るがず。



写真 5 会場 学校法人福山大学社会連携推進センター 9 階大講義室

2. 研究・著作・思想

・著作と出版

- 生前印刷物や未刊原稿が没後収集され、1999年以降合本出版（現時点で入手困難）。

・思想的背景と講義方針

- 道元・ハイデガー参照の難解な建築論。講義後半でエッセンスをわかりやすく解説予定。

・建築の目的

- 建築は形態ではなく、光・陰翳・半透明性・素材性による「自然（本然）」の象徴作用を目指す。

3. 京都大学アトリエ／資料・アーカイブ

・アトリエの運用（当時）

- 小さな RC アトリエが事務所登録や家賃なしで設計事務所的に稼働していた時代の実態。写真に指導風景（書物を開きゼミ的場）。

・資料保管・公開

- 桂図書館に大量の図面・写真保管。研究資源アーカイブで約10%公開（青図、バラ図面箱、写真）。導線は複雑。

・資料数量

- 図面約1万5千点、写真7千点、文書資料80点。

4. 作品紹介（1950年代）

・自邸（増改築で全体 RC 化）

- 若き日の自邸写真が残る。こぢんまりながら居心地の良いプラン。

- ・ 最小限店舗併用住宅（建部邸：歯科＋住居）

- 戦災復興期の「最小限住宅」潮流に呼応。1階診療所、2階住居。
- 南淡町庁舎(淡路島)
- プレストレスト梁で10m 超スパン。日本の多層構造への早期適用例。学会作品賞ノミネートも本人が電話で辞退。

5. 作品紹介 (1960年代)

- 鳴門市民会館(実質体育館)
- 市民に広く利用。2024年に隣の市庁舎とともに解体、現庁舎は内藤廣設計。
- 京都市上下水道局・下水ポンプ場
- 機械スペースを包む立派なシェル構造。後段の思想説明に重要作として再登場。
- 京都大学工学部校舎群の建て替え
- 高度成長期の定員倍増に伴う多数整備。
- 蹴上浄水場(上水場の長大建物)
- 都市インフラでの大規模経験。
- 衣笠山の家(京大教員住宅)
- コンクリートで日本的内部空間創出の試み。現存する。
- 東山会館(京都市施設)
- 中庭とレリーフ。閉鎖・取り壊し済み。

6. 京大センター計画・1970年代の展開

- 京大センター計画(講堂+体育館一体型／1964～構想)
- 鳥の翼のような形態で背中合わせに接続。代々木競技場の影響が推察される。
- 豊岡市民会館(1971)
- 長らく建替え議論も近年は改修方針で進行。
- 京大会館(体育館のみで縮小実現)
- 外周の阿弥陀くじ状RCルーバーが特徴。学会作品賞最終候補も倉敷アイビースクエアに敗北。潮流がポストモダニズムに移る中、増田はモダニズムを貫徹。
- 鳴門での多数作品(1970年代)
- 市内に合計19棟設計。学校施設の再利用を市が推進。共済会館は取り壊し。瀬戸幼稚園は四枚風車状シェルの幼稚園はりノベ再利用中。

7. 鳴門市文化会館の改修と法規

- 経緯と再オープン
- 1982年オープン(増田逝去翌年)。築約40年を経て改修中。設計監理は香山建築研究所、施工は大林組。2027年夏に再オープン予定。

- 空間と法規課題

- 大きな吹き抜けが柱梁のみで成立する伸びやかな空間は現行法規では新規再現困難。防火区画と防災区画の不備に配慮しつつ空間性を壊さない復元的改修。

8. 光の空間操作 (半隔離) と具体事例

- 半隔離の概念

- 障子や半透明ガラスで「光は通すが視線は遮る」。柔らかい光が「自然(本然)」を象徴。仁和寺・遼廓亭、大徳寺・孤篷庵の伝統的事例を参照。

- 事例展開

- 鳴門市民会館(1961): 三辺すりガラス、天井反射で柔光。低予算の中で空間的発見。
- 鳥羽下水処理場(1961): 四面半透明で拡散光がふわっと入る。出来上がって価値を認識。
- 京大会館計画(1960年代後半): 外壁透過光を模型でスタディ。未実現の代替として体育館でルーバーやトップライトによる拡散光を採用。
- 鳴門市文化会館: 重厚な外観と内部の明るさ、時間とともに移ろう影。橋本氏がタイムラプスで壁面の影の動きを記録。

9. コンクリート素材と光の質・ディテール

- 外剛内柔の対比

- 外壁は一六尺木製パネル型枠で成形された縦ルーバーにより重厚・威圧的な存在。粗面コンクリートの乱反射が内部にマイルドな光をもたらす。安藤忠雄のシャープな光に対し、増田は拡散光を志向。

- 施工・納まり

- ルーバー寸法体系、ガラス取り合い、結露対策、断熱配置(Y字梁近傍の細長い断熱/クッション状断熱)など現場調整の具体。台風時の窓破損対応、喜多村先生の現場常駐など。

10. 「自然(本然)」と象徴の理論

- 道元「清浄本然なる山河大地」

- 可視的自然(草木)と「自ずからそうなる」生成・変化そのものとしての自然を区別。四季の移ろい・輪廻的感受性と接続。
- 夢窓疎石の苔寺(西芳寺)枯山水
- 山腹石組が水の流れを象徴。蘇東坡の詩を内的参照と推定し、溪流音=仏法の本念の声という禅的解釈。「無常説法」により自然全体が宗教世界そのもの。
- 象徴=「指し示して消える」矢印

- 指東庵にまつわる中国故事の類型を援用。建築は対象(自然層)へ視線を導く「矢印」として機能し、注視の瞬間に指示物自体は消える。
- 半隔離空間とわびさび
- 障子越しの拡散光が得られぬ雰囲気を生じ、形ではなく光・陰翳が意味を立ち上げる。
- 「天然／本然」と不可知の自然層
- 人間中心－人工－自然－不可知自然の重層モデル。地中深層、地震活動、野生生態など我々の知を超える自然の全体性へ、建築の象徴作用が眼差しを喚起。

11. 作風の発展と記録の役割・国際文脈

- 気づきから理論化へ
- 初期作で偶発的に生じた光環境を端緒に、模型・ディテールで意識的に実装へ。タイムラプス映像記録が空間特性の認知を助ける。
- 国際的展開
- 日本建築論の英仏翻訳、二川幸夫の写真が理論と体験の媒介として引用。

12. 技術的ディスカッション断片

- HPシェルと手描き設計
- 相互アーチを直線で接続する複雑なHPシェル形態(船を逆さにしたような形)を手描きで設計した困難。
- 鳥羽下水処理場の現場課題
- 台風対応、ガラスと上部コンクリートの五分隙間処理、結露抑制の断熱工夫など、即興的な現場解決。



写真6 田路貴浩氏
増田友也氏の紹介



写真7 田路貴浩氏
人間中心－人工－自然－不可知自然の重層モデルについて

3.2 パネルディスカッション

本パネルディスカッションでは、建築家・増田友也氏の設計思想とその継承を多角的に考察する各登壇者による貴重な講演と活発な意見交換が行われ、大変有意義な討論の場となりました。まず、常松光政氏(株式会社都間土建常務取締役／福山大学建築学科2期生)が「福山大学時代の増田友也先生」と題して、学生時代の貴重な体験談をもとに、師弟関係の実態を生き生きと語られました。続いて、西村謙司氏(日本文理大学工学部建築学科教授)に「昭和55年10月講義『木造塔婆について』にみる増田友也の建築観」と題して発表いただきました。最後に、市川秀和氏(福井工業大学工学部建築土木工学科教授)に「増田友也と喜多村幸夫——建築論の京都学派の視点から」と題してご発表をいただきました。

各発表後の質疑応答では、参加者から多くの質問が寄せられ、登壇者の先生方には丁寧かつ示唆に富むご回答をいただきました。以下にその要旨と、内容のメモを紹介します。

常松光政氏(株式会社都間土建常務取締役／福山大学建築学科2期生) 演題「福山大学時代の増田友也先生」について

増田友也教授に直接師事された常松光政氏から教育者としての増田氏の実像とその建築思想について、貴重な体験談を伺いました。

●講演要旨

1. プロローグ

常松氏は昭和52年、工業高校(建築科)から福山大学へ進学した。大学では一般教養科目(数学・英語・物理学)に苦戦しつつも、専門科目では工業高校で習得した知識を活かした。しかし、高校での建築教育は「公式や概念を暗記させる」ものであり、深い理解がなかったことに後で気付いた。

2. 増田友也先生との出会い

4年生時に増田友也教授のゼミに配属された。増田先生は京都大学名誉教授で、自由奔放な風貌と革新的な思考の持ち主であった。「建築空間論」の講義は従来のユークリッド空間を否定する現象学的アプローチを採り、学生たちに衝撃を与えた。

3. 建築空間の展開

増田先生は「点」や「線」の定義から根本的な問いを投げかけ、形而上的な建築観を覆した。講義ではフッサール、ハイデガー、メルロ＝ポンティなどの哲

学や、禅・茶道・芸能など東西の思想を織り交ぜながら、建築を「現象学的存在論」として捉える方法を教えた。

4. 卒業研究

増田先生から与えられた卒業研究テーマは「瀬戸内海の栽培漁業」であった。通常の建築設計とは異なり、海域の生態系調査から始め、自然と一体化した研究施設を構想した。増田先生の指導は「風景との調和」「海からの視点を重視する」というもので、厳島神社や中国・雲崗石窟を例に挙げつつ進められた。

5. 福山大学で増田先生が求めたもの

増田先生は京都大学側の反対を押し切り、福山大学で教鞭を執った。その背景には「教育の本質は場所や学生のレベルに関係ない」という信念があったと推測される。常松氏は増田先生の教えを「一子相伝」のように受け止め、深く学び取ろうとした。

6. 教育者と実作家としての増田先生

増田先生は実作（建築設計）と教育の両面で優れた人物。戦中・戦後の過酷な経験から「存在証明」を重視し、建築を通して自己と世界の関係を問い続けた。「理解できないのは学生の欠点」という厳しい言葉も、命懸けの教育観の表れだった。

7. 空間論の核心

増田先生の建築論の鍵は「トポス（場所）から空間を盗み取る」という概念である。例えば、厳島神社の「海からの視点」や仏像の「指先の先にある不可視のもの」を捉えることが、真の建築空間の創造につながると説いた。

8. エピローグ

増田先生は「本物の建築家になるには7年かかる」と語り、4年制大学の限界を指摘した。卒業間際には「君看双眼色 不語似愁無」という漢詩を贈り、戦争体験を背景にした深い憂いと未来への期待をにじませた。

まとめ

福山大学建築学科2期生・常松氏が増田友也という異才の建築家から受けた影響を、哲学・教育・実践の側面から紹介した回想録とも言える報告でした。増田先生の思想は「現象学的建築論」を基盤とし、伝統的な建築教育を根底から問い直す内容でした。その教えは単なる技術指導ではなく、「生き方そのもの」を建築に投影するものであり、常松氏の人生観にも深い影響を与えたことがうかがえます。



写真 8 常松光政氏
4年生になり、増田氏に直接指導を受けた



写真 9 常松光政氏
増田氏による即興的設計指導記録：飲食店の紙ナプキンに増田氏がスケッチして指導、1980年

西村謙司氏（日本文理大学工学部建築学科教授）

演題「昭和55年10月講義『木造塔婆について』にみる増田友也の建築観」について

日本文理大学の西村謙司教授から、増田友也が1980年（昭和55年）10月に行った「木造塔婆について」の講演を分析し、考察した内容の紹介が行われました。

●講演要旨

増田友也（1914－1981）は1980年10月、「木造塔婆について」と題する講義を福山市中央公民館、尾道市役所、福山大学の3会場で行った。この講義では、国宝・重要文化財指定の明王院、浄土寺、西国寺の木造塔婆を題材に、仏教と木造塔婆の歴史的経緯を通じて伝統の本質を探究した。

増田の建築観の特徴

1. 歴史的・体系的なアプローチ：個々の建築物をその原初的事態から遡り、時代と地域を超えた建築過程を解明する
2. 伝統と創作の関係性：仏教がヴェーダ宗教の否定的継承として創作されたように、伝統は単なる継承ではなく創造的発展を伴う
3. 形態と意味の対応：建築形態の背後にある本質的意味を追究する姿勢

木造塔婆の分析

1. インドのストゥーパとの比較：
 - 日本の木造塔婆は層状楼閣形式だが、頂部の相輪（伏鉢と傘蓋）にストゥーパの伝統が継承



写真10 西村謙司氏
「木造塔婆について」概要説明



写真11 西村謙司氏
掲載建造物〔左より〕：明王院五重塔（福山市、国宝、1348年建立）、
浄土寺多宝塔（尾道市、国宝1328年建立） 西国寺三重塔（尾道
市、国重要文化財、1429年建立）

- 心柱に仏舍利を安置する点で本質的関連性
- 2. 構造と意匠の関係：
 - 隅木による屋根反りの実現とその力学的課題
 - 組物の発展による軒の出の深化
 - 桔木の導入による構造と意匠の分離（「革命的な変化」）
- 3. 日本的審美性：
 - 屋根の縦横比と逓減曲線
 - 軒先の反りと垂木配置
 - 「六支掛」による意匠の体系化
- 4. 心柱の象徴性：
 - 仏舍利を安置する聖なる柱としての役割
 - 漢字「柱」の語源分析を通じた垂直性と聖性の解明
 - 大地と天空を媒介する建築的意味

結論

増田の建築観は、形態の背後にある本質的意味を歴史的・体系的に探究する姿勢に特徴がある。増田は、木造塔婆の分析を通じて、伝統の創造的継承、構造と意匠の緊張関係、建築の聖的次元を明らかにした。特に「心柱」をめぐる考察は、建築が単なる物理的構築物ではなく、文化的・宗教的意味を担う存在であることを示している。

演題「増田友也と喜多村幸夫——建築論の京都学派の視点から」について

福井工業大学の市川秀和教授により、増田友也を師とする喜多村幸夫の思想的連関について、建築論の京都学派という新たな視点から考察が行われました。

●講演要旨

1. 研究の背景と目的

- ・福山大学50周年：建築学科創設に尽力した増田友也のシンポジウム開催を機に、増田の後継者である喜多村幸夫（1933–2010）を「建築論の京都学派」の視点から分析する。
- ・建築論の京都学派の定義：京都大学建築学科で、武田五一を起源とし、森田慶一から増田友也へ続く教員・門下生の人間関係と学際的なネットワークから生まれた独自の建築思想・実践。森田と増田の理論を基盤に、門下生による継承と展開を探る。

2. 喜多村幸夫の生涯と建築活動

- ・生い立ち：福井県敦賀市で陶芸家の家系に生まれ、芸術的な環境で育つ。戦後の復興事業に触れ、建築家を志す。
- ・京都大学時代（1952–1956）：森田慶一と増田友也に師事し、クラシックな意匠と哲学的な思索を融合する姿勢を学ぶ。同期の白井剛や後輩の田中喬らと交流。
- ・郵政省時代（1956–1961）：官庁建築に携わりつつ、古典的品格のあるデザインを追求（例：吹田垂水宿舎）。
- ・京都大学助手時代（1961–1971）：増田研に戻り、「京都市立体育館」コンペ、「鳴門市庁舎」などの設計でダイナミックな構造表現を試みる。
- ・1963年9月に設計事務所ゲンプラン設計担当役員、1971年10月に一級建築士事務所「生活環境研究所」の所長に就任。鳴門市共済会館（1972）では、建築を都市的ネットワークの一部としてとらえ、人と組織、施設相互を結びつける「結節点」として設計された作品であった。
- ・福山大学時代（1978–2006）：増田と共に建築学科の基礎を築き、「図書館・管理棟」などを設計。教育者として多くの人材を育成した。

3. 建築思想の核心

- ・ハイデッガー哲学の影響：存在論的な建築観を探究。論文「円通寺庭園」（1985）では、増田の「半隔離」理論を発展させ、庭園内の石組に「世界（顕在性）」と「大地（潜在性）」の対立を見出す。
- ・古典主義と近代化の統合：ヨーロッパの意匠・日本空間の現象学的研究・



写真12 市川秀和氏
喜多村幸夫氏の紹介



写真13 市川秀和氏
増田研究室の卒業生について

ハイデッガー哲学を独自に融合。

4. 京都学派における位置付け

- 森田・増田からの継承：建築の「存在の意味」を問う思索的な姿勢を受け継ぐ。
- 逆照射の可能性：喜多村の実践を通じて、森田・増田の理論の多様性や限界を再考する端緒を提示。

5. 結論

- 遺された課題：喜多村の設計実践と論文は未整理の部分が多く、門下生や関係者によるさらなる研究が期待される。
- 京都学派の拡張：喜多村の生涯を通じ、建築における「人間性」と「学際性」の重要性を再確認。

質疑応答および来場者参加状況

本シンポジウムには総勢82名の方々にご来場賜りました(内訳：研究者17名[21%]・学生24名[29%]・一般参加者41名[50%])。この参加者構成から、本研究テーマが専門家だけでなく、広く地域社会からも関心を集めていることが示唆されます。特に一般参加者の割合が半数であることは、建築文化の地域浸透を考える上で極めて意義深い成果と言えます。

4. おわりに

「福山大学における増田友也の活動」と題しました本シンポジウムは、多数のご来場者様の温かいご支援を賜り、盛会裏に終了することができました。謹んで厚く御礼申し上げます。



写真14 パネルディスカッションの様子
左から市川氏、西村氏、常松氏、田路氏



写真15 パネルディスカッションの様子
質問に回答する常松氏

登壇者の皆様から賜りました学術的知見により、建築家として、また教育者としての増田友也氏の多面的な活動像が、以下の観点から浮き彫りとなりました。

1. 教育者としての功績：福山大学建築学科における教育理念と実践方法
2. 設計思想の特質：モダニズム建築と日本伝統様式の融合への独自アプローチ

とりわけ、増田氏と直接ご交流のあった関係者様から頂戴した貴重な証言は、当時の教育現場の息吹を伝えるとともに、現代の建築教育にも通じる深い示唆に富むものでした。これらの成果は、単なる建築理論研究の枠を超え、地域建築文化の再評価と継承において、極めて重要な学術的意義を有するものと確信しております。

また、当日は会場の後方で増田設計による「旧尾道市庁舎」の図面コピーの

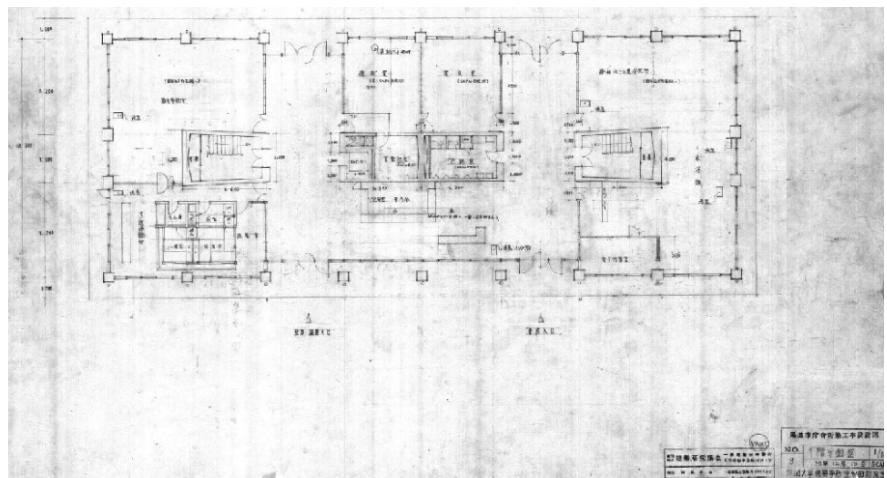


図3 「尾道市市庁舎新築工事設計図」 1階平面図 昭和33.12.10
出典：京都大学建築学教室増田研究室

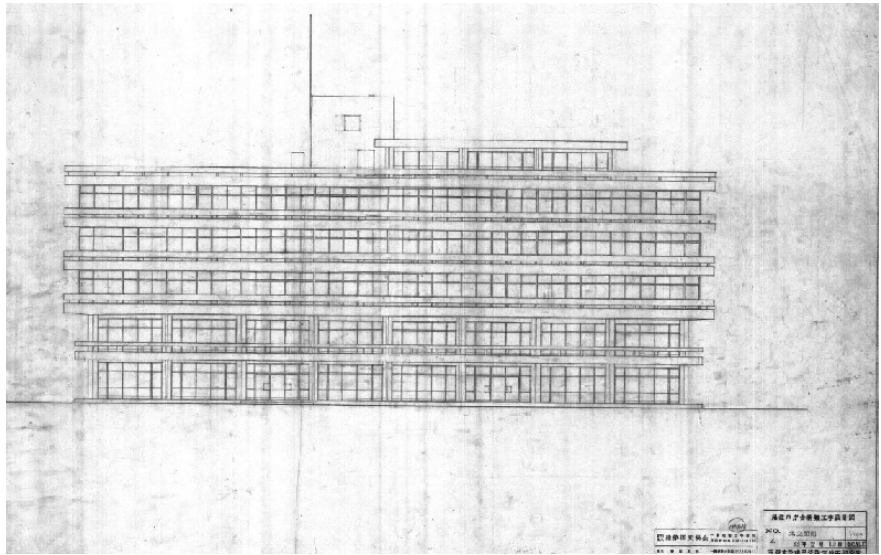


図4 「尾道市市庁舎新築工事設計図」北立面図 昭和33.12.10

出典：京都大学建築学教室増田研究室

展示を行いました。この展示は、戦後モダニズム建築の貴重な遺産である同庁舎の設計思想や建築技術を来場者に伝えることを目的としていました。

今後の研究課題

戦後日本建築の思想的系譜とその現代的意義を明らかにするために、下記3つの研究課題をすすめ、日本の空間論の継承方策や地方大学における建築教育モデルの可能性を探求します。

- 1.「増田友也の建築理念と現代建築への展開」：モダニズムと日本伝統の融合手法を現代建築へ応用する方法論の構築
- 2.「喜多村幸夫建築思想の系統的再構築」：卒業設計「小美術館」を起点とする思想的変遷の追跡
- 3.「福山大学建築教育の変遷・増田友也のアプローチを中心に」：京都大学退官後の福山大学における教育・実践スタイルの変化と影響

これらの課題を相互関連的に検討することにより、日本の空間論の継承方策、地方大学における教育モデルの検証が可能となります。

本シンポジウムの開催にあたり、ご登壇者の皆様をはじめ、全ての関係者様のご尽力により、学術的にも組織的にも円滑な進行が可能となりました。改めて心からの感謝を申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。